

便利な小物

あれこれ

ピンホールシステムカメラとマルチフォーマットバック

Zero 4 × 5 & 612B ブローニーバック

価格：Zero4 × 5 デラックス；39,900円、612B；31,500円 問合せ：エー・パワー (04)2923-5234

エー・パワーは、木製ピンホールカメラをはじめ、円筒形の缶を単に利用し、パノラマ写真のようなピンホール写真を撮るピンホールブレンダー、中国製トイカメラ、ホルガなど、ユニークな商品ばかりを扱う会社である。

● Zero4 × 5 システム

今回紹介するゼロシリーズは、香港のゼロイメージ社が製造する木製ピンホールカメラで、135 やブローニーフィルムを使用するものなど、さまざまなタイプの製品がそろっている。今回紹介する Zero4 × 5 システムは、マルチフォーマットに対応するシステムカメラで、カメラ本体に専用アクセサリを組み合わせることで、多様な楽しみ方ができる。

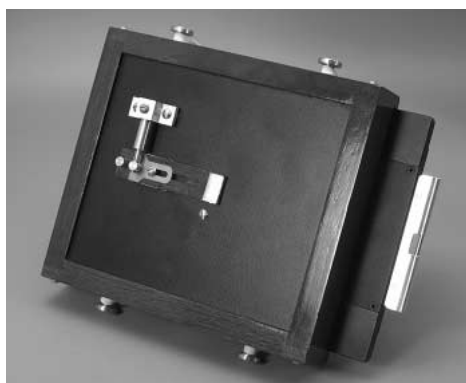
Zero4 × 5 のカメラ本体はチーク材で、使われている金具は真鍮製。チーク材の表面はニスで美しく仕上げられ、ディアドルフなど往年の木製暗箱を彷彿させる優雅なスタイルをしている。ベーシックボディと名付けられた本体には、全部で6種類のピンホールとゾーンプレート(表1)を備えたターレット式のボードを装備。撮影目的によって使い分ける。

ゾーンプレートとは、透明の板に水面の波紋のようにいくつもの黒い輪が同心円上に書かれたもので、光の回折を利用して像を結ぶものだ。得られる像はピンホールよりさらに柔らかく、F値も明るい。

ピンホールとゾーンプレートの焦点距離は25、50、75mmの3種類。25mmを選んだときはベーシックボディだけを使用。50mmのときは別売りのエクステンションフレームを1個追加。75mmのときはさらにもう1個追加して撮影する。さらに焦点距離の長いピンホールを自作して使うときは、フレームを追加することが可能だが、とりえず強度の問題から10個までが推奨範囲となっている。それぞれのフレームには真鍮製のピンが4本立っていて、ここに付属のゴムバンドを引っ掛けて固定。非常に単純な方式だが、各フレームを固定するには十分な強度を備えている。ただし、引っ掛けるときに手元が狂うとバンドが飛んで行ってしまふこ

表1 ピンホールのスペック

焦点距離	25mm	50mm	75mm
ピンホール径	0.2mm	0.28mm	0.4mm
F値	F138	F176	F216
ゾーンプレート	11ゾーン	21ゾーン	33ゾーン
F値	F43.52	F45.45	F44.7



ベーシックボディにフィルムホルダーを取り付けた状態

とがある。屋外で使用するときには紛失の恐れがあるので、予備のバンドを用意しておくともよだろう。本体とエクステンションフレームは2カ所に三脚ネジ穴を装備。縦横どちらの向きでも三脚に取り付けることができる。

シャッターは木製の部品と真鍮製の金具を組み合わせたシンプルなものだ。常時閉じた状態になっていて、ケーブルリリースのほか、指で直接操作して露光する方式で、木製部材を横にスライドさせるとタイム露光もできる。説明書によると、露光時間が1秒以下のときは、指で直接操作することを推奨しているが、25mmの焦点距離を選んだときは画角が非常に広く、指が画面に写り込むことがあるので注意が必要だ。

カメラ本体とエクステンションフレームの後部は、4 × 5 インチ判の国際規格になっているので、4 × 5 インチ判のカットシートフィルムホルダーやフジクイックロード、ポラロイドバックなど、さまざまなホルダーが装着できる。さらに4 × 5 インチ判用ロールフィルムホルダーを使えばブローニーフィルムも使用可能だ。



ボディの裏側に、ピンホールとゾーンプレートを3つずつ取り付けられたターレットを備えている



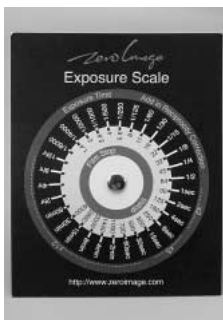
ベーシックボディ(右)とエクステンションフレーム。各フレームに縦横位置用三脚ネジ穴を備えている



ロールフィルムホルダーは4×5国際規格なので、通常の4×5インチ判カメラにも利用できる



ロールフィルムホルダーは、6×4.5cm判から6×12cm判に対応。マスクを交換して使用する。フィルム送りは赤窓式。選んだフォーマットによって使用する赤窓と数字の設定が異なるので、注意が必要だ。ホルダーは全金属製で、重厚な作り



付属の露光ガイド。25mmのピンホールのF値は138に相当。露出計の目盛りがF4・1/125秒を示したときは、約2秒が適正露出になる。このガイドの裏面には、各ピンホールとゾーンプレートの焦点距離とF値の表が印刷されている（別売可）



25mmのピンホールで撮影。周辺部の光量が極端に落ちている。シャッター速度約1秒

●エー・パワー612Bブローニーバック

エー・パワーでは、ユニークなロールフィルムホルダーを用意している。このホルダーは6×4.5cm判、6×6cm判、6×9cm判、6×12cm判のフォーマットに対応。マスクの交換だけで、4種類のフォーマットが撮影できる。使用できるフィルムは120のみ。フィルム送りが赤窓式なので速写性はそれほど期待できないが、とにかく1つのホルダーで異なる種類のフォーマットが利用できるので、フォーマットごとにホルダーをそろえる必要がなく、とても経済的だ。

もちろん、このホルダーは4×5インチ判の国際規格を採用しているの、一般の4×5インチ判カメラにも使用可能。一般の大判カメラユーザーにもお勧めのアクセサリだ。

●実際の撮影

このカメラで撮影する場合、問題になるのがフレーミングだ。Zero4×5にはファインダーの類はっさいない。さらにフォーカシングスクリーンを取り付けフレーミングをしようにも、F値が暗すぎて像はほとんど見えない。今回は、画面の中心を決めて、おそらくこの範囲が写るだろうと想像しながら、撮影を済ませてしまったが、厳密なフレーミングを望むなら、あらかじめテスト撮影をしてデータをとるしかない。またポラロイドバックを持っていれば、これを利用する手もある。いずれにしても、きちんとした作品を撮るためにはファインダーを手作りするなどなんらかの工

夫が必要である。

当然、露出計は付いていない。露出については単体露出計を使うが、ふつうの露出計にF100を越える目盛りは付いていない。そこで活躍するのが、付属の露光ガイドだ。これを使えば選んだピンホールに対する適正露出を即座に知ることができる。また実際の撮影ではシャッター速度が数十秒に及ぶことも多く、相反則不軌も考慮しなくてはならない。

だが、以上の話は、あくまでも原則である。今回は初めて使うこともあり段階露出を行ったが、露出が数十秒という長時間になるときは、ほとんど差が出なかった。おそらく、このカメラを使い込んでデータを蓄積すれば、露出計を使って厳密に露出を測るより、適切な露出が得られるようになるのではないだろうか。

また今回の試写では、カラーリバーサルフィルムを使用した。焦点距離が短い場合は、著しい周辺光量不足が発生した。どちらかという、このカメラの場合、ラチチュードの広いカラーネガやモノクロフィルムを使用し、プリントの段階で、このあたりの調節を行ったほうがよさそうに思えた。またネガをスキャナーでスキャンしてデジタルデータに変換、フォトショップで調整する方法もある。

とにかく、このカメラを使いこなすには、さまざまなノウハウが必要である。シャッターを押せば写る最近カメラへのアンチテーゼとして、非常に存在意義のあるカメラといえるだろう。 (中村 文夫)